

服薬アドヒアランスの指標としての服薬時イベント

加藤 まどか¹⁾、緒形 富雄²⁾、佐藤 絵馬²⁾、前田 守³⁾、長谷川 佳孝³⁾、
月岡 良太³⁾、森澤 あずさ³⁾、大石 美也³⁾

- 1) 株式会社インファーマシーズ イン薬局 豊岡店
- 2) 株式会社インファーマシーズ
- 3) 株式会社インホールディングス

【目的】患者の服薬アドヒアランスは薬物治療の効果や安全性に大きく関係し、薬局薬剤師はこれを維持、向上することも職責の一つである。そのためにも、患者の服薬アドヒアランスを逐次把握することが重要である。そこで本研究では、患者の服薬アドヒアランスの指標とできる事象として患者背景、処方状況、服薬時イベントなどに着目し、その有用性について検討した。

【方法】2018年11月12日～30日に当社が北海道で運営する保険薬局98店舗に来局し、処方箋受付番号が5の倍数であった患者のうち、同じ服用時点で2剤以上処方され、かつ、水剤や散剤の処方がなかった患者556名を対象にアンケート調査した。調査項目は、「飲み忘れの有無」「年齢」「性別」「服用錠数」「一包化調剤の有無」「服用時点数」「1回の服用時点で何回に分けて薬を服用するか」「服用時に薬を落とした経験」「薬の管理者」「服薬補助製品の使用経験」とした。得られた結果は、「飲み忘れの有無」によって群分けし、有意水準0.05としたWelch's t検定、カイニ乗検定およびFisher正確確率検定で統計解析した。また、「飲み忘れの有無」を目的関数、その他を説明関数としたロジスティック回帰分析にて統計解析した。なお、本研究はアイングループ医療研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号:AHD-0001)。

【結果】飲み忘れ有り(n=274, 49.3%)と無し(n=282, 50.7%)の患者数はほぼ同じであり、性別にも有意な差は見られなかった。ロジスティック回帰分析の結果から、「飲み忘れの有無」に対しては「服用時に薬を落とした経験」(95%信頼区間 1.766～3.617)のみが大きく影響し、そのオッズ比は2.53であった。

【考察】本研究の結果からは、「服用錠数」「一包化調剤の有無」「服用時点数」などの服薬動作の負荷、「1回の服用時点で何回に分けて薬を服用するか」「服薬補助製品の使用経験」などの嚥下能力、「薬の管理者」などの服薬管理能力に関する事象は「飲み忘れの有無」に有意な相関性がなく、「服用時に薬を落とした経験」のみが「飲み忘れの有無」、ひいては服薬アドヒアランスの指標にできる事象の一つである可能

性が示された。したがって、薬局薬剤師は服薬指導時などに「服用時に薬を落とした経験」を聞き取った際には、その背景や環境を細かく確認することで、より明確にアドヒアランスに影響を及ぼす因子を見出せる可能性があるのではないかと考える。

(第52回日本薬剤師会(2019年10月, 下関)にて発表)